

〈論 文〉

ハリギリの丸木舟

民族誌資料／考古資料／口承文芸資料にもとづく一考察

本 田 優 子

目次 はじめに

Ⅰ 民族誌研究の側面から

Ⅱ 考古学研究の側面から

Ⅲ 口承文芸資料の検討を通して

おわりに

キーワード：アイヌの丸木舟、丸木舟の材料、アイヌ民族誌研究、アイヌ考古学研究、アイヌ口承文芸

はじめに

筆者は昨年、アイヌの世界観のなかで植物がどのように位置づけられ、認識されてきたかを考察するための第一歩として、口承文芸資料にみられる植物および植物神について検討した⁽¹⁾。

その際、アイヌの口承文芸資料には具体的な加工法や利用法など、いわゆるレンピ的な叙述はほとんど含まれず、口承文芸資料から食物の調理方法やものの製作過程に関する情報を得るのは困難だという点を指摘した。その点ともかかわり、口承文芸のなかで特定の植物が道具材としてタブーをもって語られることは管見の限りない⁽²⁾。

しかし、唯一の例外として沙流川流域にハリギリの舟をタブーとする以下のような口頭伝承がある。

くある男がカツラの舟とハリギリの舟を持っていた。いつの頃からか夜になると川の方から物音が聞こえるようになった。不思議に思っている晩川へ下りてみると、カツラの舟とハリギリの舟が

(1) 本田優子「アイヌ口承文芸にあらわれる植物および植物神について」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要第3号』、北海道立アイヌ民族文化研究センター、1997年。

(2) 食材に関しては「スクフ キナ ア・エ ヤニ ラヤン (バイケソオという草を食べ危うく死ぬところだった)」(萱野茂『ウエベケレ集大成』、アルドオ、1974年) など、若干の例がある。また、たとえばクルミの矢やクルミの薬によって鮭が遡上しなくなるという話が、知里幸恵『アイヌ神謡集』(郷土研究社、1923年) などでも知られているが、このような場合は、悪魔・鬼・禍神などが魔的な力を込めて用いているものであり、日常の道具を作る際のタブーとはいえない。

まるで人間のように殴り合って喧嘩をしていた。するとその晩の夢にカツラの舟の女神が現れ、カツラの舟ばかり利用されることを妬んだハリギリの舟が、毎晩自分を虐めていたのだと告げた。翌日、男はカツラの舟の女神に教えられた通りにハリギリの舟を燃やすとともに、山に残っていた切り株や根をすべて掘り起こして燃やしてしまった。男の父親は、切り株を燃やした煙が海の方になびいていったと聞き、以後6年間、海漁に行くことを禁じた。ところが足掛け6年経ったことに安心した男は海に出てしまい、恐ろしい化け物に追いかけられた。神々の助けを得て命だけは助かったものの、体は腫れ上がって溶け崩れ、化け物のような姿になってしまった。>

このような内容の散文説話であり、物語の最後では、決してハリギリで舟をつくってはならないと強く戒めている。

しかし、北海道内のいくつかの施設にはハリギリの丸木舟が現存し、アイヌの民族誌に関する文献にもハリギリは舟材として記載されている。

本稿では、ハリギリの丸木舟についてのこれまでの記録や記述を整理するとともに、丸木舟の用材としてどういう樹木が用いられてきたのか、そのなかでハリギリは特殊な存在であったのか、ハリギリの舟にかかわるタブー発生の要因はなにか、などについて、民族誌、考古学、口承文芸の三つの側面から考察を加えたい。

I 民族誌研究の側面から

初めに用語について整理しておく。アイヌ語の口承文芸資料のなかで「チツ」、和訳資料のなかで「舟」・「船」などと記されているアイヌの舟について、ここではその他の船舶と区別するために丸木舟という呼称を用いることにする。なお、チツに相当する単材刳船のほか、その上に板を継ぎ足したイタオマチツ（板綴舟）に相当する準構造船も、丸木舟の範疇に入れた。

なお、ハリギリは北海道内では一般的に「セン」「センノキ」と呼ばれ、「栓の木」と記述される場合もある。アイヌ語では、沙流川流域を含む多くの地域でアユシと呼ばれる。

まず、現存するハリギリの丸木舟について見てみる。

アイヌの丸木舟に関する論考としては、難波琢雄の「アイヌ丸木舟の地方型」⁽³⁾があり、模型5点を含む22点の現存丸木舟に関する実測調査表が掲載されている。このなかでは、ハリギリを材料としたものとして、静内で明治初期に製作された模型（全長70.0cm、幅13.4cm）1点が含まれているのみである。

由良勇も『北海道の丸木舟』⁽⁴⁾のなかで、北海道内の現存丸木舟について報告しているが、ハリギリを用材としたものとして以下の4艘を挙げている。

(3) 難波琢雄「アイヌ丸木舟の地方型」『アイヌ文化 第16号』、アイヌ無形文化伝承保存会、1991年。

(4) 由良勇『北海道の丸木舟』、マルヨン印刷株式会社、1995年。

1. 天塩町更岸鏡沼公園	天塩町広瀬某製作	長さ520cm	幅60cm
2. 市立函館博物館	八雲町椎久キミ氏寄贈	長さ648cm	幅59cm
3. 釧路市立博物館 ⁽⁵⁾	標茶町で収集	長さ490cm	幅50cm
4. 北大パチェラー記念館 ⁽⁶⁾	製作地不明	長さ344cm	幅51cm

ただし、両者ともに、材料となっている樹種の同定方法について明らかにされていないため、これをそのまま無批判に受け入れることはできない⁽⁷⁾。また、現存丸木舟リストのなかに泥炭地からの出土丸木舟など資料としての性質の異なるものが混在しているなど、利用の際に注意を要する点がいくつかある。

次に、これまでのアイヌ民族誌研究における文献記述を見てみる。

犬飼哲夫は「アイヌの丸木舟の作製」⁽⁸⁾のなかで、ハリギリを舟材として用いる地方として八雲と千歳をあげている。また佐藤直太郎は、釧路アイヌは舟材として、弾力があって丈夫で真っ直ぐな「ヤチダモ」を最も多く使用したが、「セン」や「カツラ」も用いたと述べている⁽⁹⁾。

さらに知里真志保は『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』⁽¹⁰⁾のハリギリの項で、「この木の材で丸木舟、木鉢（天塩nima, 屈斜路ni-ita）、臼、杵、箕の類を作った」と、舟材としての利用を第一に挙げ、しかもその地域を限定することなく「(各地)」と記している。このような点からも、ハリギリの舟材としての利用はある程度一般的だったことがうかがわれる。

ところで、そもそも丸木舟の材料はいくつかの限られた樹種に限定されるものなのだろうか。『北海道の丸木舟』および「アイヌ丸木舟の地方型」に記載されているハリギリ以外の現存丸木舟について、樹種別に収蔵地と艘数をまとめてみた。製作地が収蔵地と異なる場合は（ ）に製作地を示した。

『北海道の丸木舟』

カツラ	旭川1、旭川（二風谷）1、苫小牧2、白老4、網走1、千歳1、 恵庭（千歳の人が白老で製作）1、新十津川1、二風谷2、静内2、 札幌（常呂）1、釧路1
ヤチダモ	旭川2、月形1、美唄（月形）1、長沼1
エゾマツ	旭川3
マツ	八雲1 ⁽¹¹⁾ 、長万部1（ただし「マツ？」）

(5) 難波前掲論文では、この丸木舟の樹種をカツラとしているが、釧路市立博物館に確認したところ、ハリギリだとのこと。

(6) ただし用材の記述は、「せん(?)」。

(7) たとえば、同一の丸木舟に関する記述だと思われるにもかかわらず、両者の材料の樹木名が異なっているため、収蔵先の資料館に問い合わせた。すると、館としては材料については調査していないので、両氏の個人的判断で記載されたのだろうとのことだった。

(8) 犬飼哲夫・武笠耕三「アイヌの丸木舟の作製」『北方文化研究報告 第8輯』、北海道大学、1953年。

(9) 佐藤直太郎「釧路アイヌの舟」『佐藤直太郎郷土研究論文集 釧路叢書第三巻』、1961年

(10) 知里真志保『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』、日本常民文化研究所、1953年。

(11) 八雲町郷土資料館に確認したところ、該当する丸木舟の材料がマツという点には否定的だった。

ナラ	白老(?) 1、厚真1
タモ	旭川1、苫小牧1
カシワ	幕別1
キハダ	常呂1
ドロノキ	札幌(八雲) 1
不明	函館(八雲) 1、苫小牧2、千歳3、浦幌1、八雲1、二風谷1、 赤平(浜益) 1、厚岸5、札幌(?) 1

「アイヌ丸木舟の地方型」<模>は模型を意味する

カツラ	八雲1、室蘭<模> 1、苫小牧1、札幌(千歳) 1、札幌<模>(千歳) 1、 札幌(恵庭) 1、静内1、釧路1 ⁽¹²⁾ 、札幌(石狩) 1
トドマツ ⁽¹³⁾	釧路1
ヤチダモ	月形1
カシワ	幕別(十勝太) 1
キハダ	札幌(新十津川) 1
ドロノキ	札幌(八雲) 1、
シラカンバ	八雲1 ⁽¹⁴⁾
不明	長万部1、白老<模>(平取) 1、網走(常呂) 1、札幌(常呂) 1、 札幌<模>(旭川) 1、旭川1

よく知られるカツラ、ヤチダモはもちろんのこと、ナラやカシワなど幅広い樹種が舟材として用いられていることがわかる。

このことは以下の文献資料からもうかがえる。犬飼哲夫は前掲「アイヌの丸木舟の作製」のなかで地方ごとに舟材として用いられる樹木名を列挙している。(アイヌ語名は略)

八雲 オオバヤナギ、シナノキ、ドロノキ、カツラ、クリ、ヤチダモ、トイススというヤナギ、アカダモ、シラカバ、トチ

千歳 カツラ、ヤチダモ、ドロ

旭川 ヤチダモ、カツラ、シコロ

平取 カツラ、ヤチダモ、バッコヤナギ

また『アイヌ民俗文化財調査報告書』⁽¹⁵⁾では次のような樹木名が挙げられている。

白老 本体の記述なし 側板はマツ (第Ⅱ巻、1983年、P.10)

(12) 難波氏はカツラとしているが釧路市立博物館に確認したところハリギリだとのこと。

(13) 同じく釧路市立博物館に確認したところカツラだとのこと。

(14) 前述の(10)と同じ丸木舟を指していると思われる。

(15) 北海道教育委員会『アイヌ民俗文化財調査報告書』Ⅰ～ⅩⅥ、1982年～1997年。

- 塘路 カツラ、カツラが減少するとヤチダモ (第VI巻、1987年、P. 96)
- 荷負本村 ランコ (カツラ) か ベロ (ナラ)、トペンニ (イタヤカエデ) も使ったのではないか? (第VII巻、1988年、P. 48)
- 千歳 ピンニ (ヤチダモ) か、ランコ (カツラ) (第X巻、1991年、P. 82)
- ランコ (第XIII巻、1994年、P. 57)

山本祐弘は『樺太アイヌ住居と民具』⁽¹⁶⁾において、樺太では「ドロヤナギ」が賞用されたと述べている。

知里真志保の『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』にはハリギリのほか以下の5種類の樹木が挙げられている。

- ヤチダモ 名寄・樺太 (P. 47)
- シナノキ 長万部 (舟底) (P. 79)
- カツラ 幌別、屈斜路、天塩 (P. 153)
- クリ 幌別 (P. 174)
- マルバノバッコヤナギ (伝承地無) (P. 189)

以上、現存する丸木舟および文献上のデータを総合するならば、18種類⁽¹⁷⁾もの樹木が丸木舟の用材として用いられてきたことがわかる。

なお、沙流川流域以外の地域でハリギリが用いられた理由として、植生の問題を念頭に置く必要がある。たとえば、カツラなどが生えない、あるいは生育状況が悪くて大木にならないため、次善の策としてハリギリを用いたのではないかとも考えられる。しかし、実際にはハリギリとカツラの間に植生の違いはなく、生育状況も同様である⁽¹⁸⁾。

これらの点から、丸木舟の用材を特定の樹種に限定するという意識は、それほど強くはなかったのではないかと筆者は考える。

II 考古学研究の側面から

次に、考古学における文献資料からハリギリの丸木舟について検討してみたい。

木製品は腐敗しやすいため、一般的な遺跡からの出土例は少なく、近年の低湿地遺跡調査の進展によりようやく樹種同定を含む研究データが蓄積され始めている。

千歳市の美々8遺跡では擦文期から近世アイヌ文化期に至るまでの様々な遺物が出土しており、丸木舟およびその関連遺物も数多く含まれている。そして、たとえば擦文期の包含層から車權受台部が発見されたことにより、板綴舟が擦文期にすでに存在したことが証明されるなど、注目される調査結果が次々と報告されている。この報告によれば、丸木舟関連遺物の樹種同定の結果、舳・鱸

(16) 山本祐弘『樺太アイヌ・住居と民具』、相模書房、1970年、P. 241。

(17) マツ、タモは単独の樹種としてカウントした。バッコヤナギとマルバノバッコヤナギは同一のものとみなした。

(18) この点については、北海道立林業試験場(美唄市)および北海道立林産試験場(旭川市)にご教示いただいた。

・舷側板などの舟部材遺物の樹種は以下のような割合になっている⁽¹⁹⁾。

ハリギリ属39.3%、カツラ属10.7%、スギ属10.7%、トチノキ属7.1%、クリ属7.1%、
ハンノキ属7.1%、ヤナギ属3.6%、その他14.3%。

板綴舟に限定してみても、ハリギリ属が33.9%と主体を占めており、以下シナノキ属11.9%、ハンノキ属11.0%、カツラ属7.6%と続く。しかも「有孔板材のほとんどは、板綴舟舷側板の再加工品であることから、ハリギリ属の占有率はさらに高いと考えられる」とも報告されている⁽²⁰⁾。

また、北海道内におけるハリギリの丸木舟の出土例として注目されるものに、厚岸町の泥炭地から発見された6艘の丸木舟遺物がある。6艘のうち、単材刳船構造の丸木舟が3艘、板綴舟が3艘であるが、用材はすべてハリギリであると報告されている⁽²¹⁾。

この他、千歳市ママチ川から発掘された丸木舟の材質も、ハリギリであったことが報告されている⁽²²⁾。

以上の点からも、ハリギリは丸木舟の用材としてむしろ主要な位置を占めており、その使用の歴史もかなり古くまで遡るといえるだろう。

参考までに、北海道を除く日本列島における出土丸木舟の樹種とその件数を多いものから挙げるならば、スギ(48)、カヤ(32)、二葉松類⁽²³⁾(19)、クスノキ(15)、クリ(14)、モミ(6)、コナラ(5)、ムクノキ(5)、カツラ(5)等となる。ハリギリの丸木舟の出土は、青森、茨城、山梨のそれぞれ1例ずつにすぎない⁽²⁴⁾。一見して北海道における用材の樹種と大きく異なっていることがわかるが、その理由は、なによりも植生の違いであろう。スギ、カヤ、クロマツ(二葉松類)、クスノキ、モミは北海道には自生しない。アカマツ(二葉松類)の自生地域は北海道南部地方のみであり、クリも日高地方以东には自生しない。それゆえ、ハリギリの舟部材が多く出土する傾向は、北海道独特のものだといえる。

Ⅲ 口承文芸資料の検討を通して

以上、民族誌データおよび考古学データをみる限り、北海道ではハリギリの丸木舟は決して特異なものではなく、一般的に広範囲にわたって用いられていたと思われる。

にもかかわらず、なぜ沙流川流域にはハリギリの舟に対して前述のような強いタブーを持った口

(19) 北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群XⅧ』、1996年、P. 356。

(20) 北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群XⅩ』、1997年、P. 617。

(21) 熊崎農夫・三野紀雄「厚岸町における丸木舟について」『北海道開拓記念館研究紀要第25号』、北海道開拓記念館、1997年。これらの丸木舟の製作年代および使用年代について、新聞では「たぶん三百年前か四百年前」(『日本経済新聞』1997年8月17日付)と報道されたが、ここでは不明と記されている。

(22) 由良勇『北海道の丸木舟』、P. 11。

(23) ここでは、アカマツとクロマツを指す。

(24) 島地謙・伊藤隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』、雄山閣出版、1988年。三野紀雄は前掲「厚岸町における丸木舟について」の中で、山内文「発掘丸木舟及び櫂の用材について」(『人類学雑誌 第61巻2号』、1950年)を本州以南地域の集成として紹介しているが、むしろこの総覧の方がデータとして新しく件数も多いので、こちらに従った。

承文芸が残されているのだろうか。

この散文説話については、これまでに以下の方々の語りが記録されている。

- a) 平目カレビア「舟の化け物の話」⁽²⁵⁾ (1936年採録)
- b) 平賀さだも「桂の木の舟と栓の木の舟の喧嘩」⁽²⁶⁾ (1967年採録)
- c) 上田トシ「ランコの舟とアユシニの舟の喧嘩」⁽²⁷⁾ (1996年採録)

この三つの伝承が採録された間には、各々約30年の年月が経過しているが、登場人物やストーリーはほとんど一致している。しかし、細部においてはいくつかの差異が認められ、特に注目すべきものとして次の点をあげておきたい。

①まず、いずれの物語でもハリギリの舟がカツラの舟を虐めた理由として主人公が軽いカツラの舟ばかり使って、重いハリギリの舟を使わなかったからだとしている。しかし、a)ではカツラの舟の女神が夢のなかで「作った以上、わたしと同じ程度に、そちらも使ってやったらよかったのに」と述べており、この時点では、ハリギリの舟の使用自体がタブーとされていたわけではないことがわかる。b)やc)にはそのようなことばはみられなくなっている。

②なぜハリギリの舟が良くないのかという理由については、それぞれ次のような叙述がある。

- a) 「センノキほど憑き神（カシ・カムイ）の悪い木はない」（P. 223）
- b) 「パッノ ウェン・サンベ・コロ チクニ イサム・ペ アユシニ ネ・ルウェ・ネ
それぐらい精神の悪い木はないほどに悪いのが栓の木なのに…」（P. 143）
- c) 「アユシニ パッノ ウェンケウトゥムコロ ペ イサム チクニ ネ ルウェ ネ
ハリギリほど悪い精神を持った木はないのだ」
「アユシニ チャ アナッネ ウェンケウトゥムコロ パッノ アシトマ チクニ イサム ベ
ネ ナ ハリギリの舟は悪い精神を持ち、それほど恐ろしい木はないものなのだぞ」。
同様の描写が計四回出てくる。

いうまでもなくアイヌの世界観において樹木はそれ自体が神性を持っていると考えられているが、樹木の神と、樹木の憑き神とが同一の存在なのかあるいは異なるのか、現段階では筆者にはよくわからない。しかし、a)において、憑き神が悪いのだと語られているものが、b)ではハリギリ自体の精神が悪いのだと語られ、c)にいたっては特にその点を強調するようになっていることに注意を払う必要があるだろう。

(25) 久保寺逸彦『アイヌの昔話』、三弥井書店、1971年、P. 222。

(26) 萱野茂『ウエベケレ集大成』、アルドオ、1974年、P. 139。なお、同『キツネのチャランケ』（小峰書店、1974年）にも同じ採録テープに基づいた和訳資料「舟のけんか」が所収されている。

(27) 「アイヌ民族博物館収蔵上田トシ氏音声資料 ウエベケレ12」として『上田トシのウエベケレ』（財団法人アイヌ民族博物館、1997年）の中で紹介されているが、まだ文字化はされていない。今回はアイヌ民族博物館の許可を得て音声資料を利用した。したがってアイヌ語聞き取りおよび和訳は筆者による。なお、上田トシさんは、アユシニのことをタランボの木のこただと述べているが、前後の分脈からハリギリのことを指していると思われる。

③さらにハリギリの舟を造ることに關しては次のような差異がある。

a) 造るなどは述べられていない

b) 「イキア ニッパ・ウタラ／アユシニ・チッ アユシニ・チバナッネ ソモ ア・カラ・ペ・ネ・ナ 万が一にも、誰も、栓の木の舟はつくってはいけませんよ」(P. 156)

c) 「テ ワノ オカ ウタラ アナッネ アユシニ チッ カッパ ソモ キ ヤッ ビッカ ナ これからの人々はハリギリの舟を作らないことだよ」

以上の点を総合すると、次のような仮説が立てられる。

この物語は、かつてはハリギリに対するタブーを主題として語られていたものではなく、むしろ、「人間が道具としてなにかを作った以上は、その道具が役割を全うできるようにきちんと使わねばならない」ということが主題だったのではないか。したがって、軽くて使いやすいとされるカツラの丸木舟と対立するのは、ことさらセンノキである必要はなく、それ以外の樹木を材料とする舟でもよかったのではないか。当然そこからは、ハリギリに限定したタブーは生まれてこない。

参考までに、木材としての比重は、カツラが0.49、ハリギリは0.5とほとんど変わりはない。これに対しヤチダモは0.65と重い⁽²⁸⁾。それゆえ、カツラとハリギリの間には、物語中に語られるような重さにかかわる舟材としての優劣はあまりないように思える⁽²⁹⁾。しかし、c)についての解説部分で語り手が述べていることだが、ハリギリの若木や細い枝には鋭利な刺がびっしりと生えており、その刺で傷を作ってしまうと時によっては体中が腫れ上がり動けなくなる⁽³⁰⁾。おそらくそのようなことが「精神が悪い」という捉え方につながるのだろうが、その点が語り手のなかで強く意識されることにより、ハリギリの舟までもがタブー視されていったのではないか。

この仮説の傍証として、他地方に伝わっている類話を挙げたい。ただし、類話として確認できたものは以下の一例だけである⁽³¹⁾。

d) 菊地クラ (美幌) 「丸木舟の争い」⁽³²⁾ (採録年不明)

興味深いことに、この物語でカツラの舟と争っているのはハリギリではなく、たしかに舟としては重い旭川地方で一般的に用いられてきたヤチダモの舟である。しかも、主人公の「オタシドングル」がヤチダモの舟を焼き、二度とヤチダモでは舟をつくらなかったというところで物語は終わり、a)～c)に見られるような強いタブーを持った内容にはなっていない。

(28) 世界の有用木材300種編集委員会『世界の有用木材300種—性質とその用途』、日本木材加工技術協会、1975年。

(29) ただし、吸水性に關して多少の違いがある。木口面では両者とも差異がないが、板目面での吸水性は、ハリギリの方がカツラよりも高くなっている。それゆえ、水に濡れた後は、やはりハリギリの方が重くなるだろう。なお、ヤチダモの吸水性はハリギリとほぼ同じ。前掲『世界の有用木材300種—性質とその用途』

(30) 物語の後半部、主人公の体が腫れ上がって溶け落ち、髪や髭だけでなく、まつげや眉毛までもが抜け落ちて妖怪のような姿になったという描写との共通点が興味深い。

(31) 前掲の由良勇『北海道の丸木舟』のなかに、カツラの舟とドロヤナギの舟の物語が北見地方で伝承されていると記されているが (P. 96)、残念ながら見つけることができなかった。由良氏にお会いした際にも直接お尋ねしたが、はっきりした回答は得られなかった。

(32) 更科源蔵『アイヌ民話集』、みやま書房、1981年、P. 267。

ところで、沙流川流域に伝わっているハリギリの舟の物語は他の散文説話と比較して次のような特徴を持っている。物語の主人公である「わたし」は石狩の男である。沙流川流域に伝承される散文説話には石狩を舞台にするものが多いが、そのような場合、同じ石狩の男によって物語が語り終わられるのが一般的である。あるいはそうでない場合でも、主人公が入れ替わるなど、途中から重要な役割を果たす人物のことばによって物語が終息することが多い。しかしこのハリギリの舟の散文説話のうち、a)とb)は以下のような形式で終わっている。

a)「…と、この男に会った沙流から来た人たちが物語ったのである」

b)「シコロカネ ハウエ・アン・アイヌ ア・ヌカラ シコロ サルン・ウタラ ハオカ・コロ・アリキ／シコロカネ アン・ウウエペケレ・ネ と書いた人をわたしは見た、と、沙流川の人たちが言いながら来たという物語です」

中川裕は物語中の地名について次のように述べている。「沙流川の伝承に沙流川流域の地名が出てくることはあまり多くない。これは、自分の土地や一族についての伝承は、ウバックマ『いわれ話』⁽³³⁾という、また別のカテゴリーになってしまうからではないかと考えられる」

だとするならばこの物語は、石狩を舞台にした典型的な散文説話であるにもかかわらず、その伝承地が自らの住む沙流川流域であることを明示し、かつ生活文化における強い教訓を含んでいるという意味ではウバックマ的な要素も備えた珍しいパターンの散文説話だといえる。石狩の物語と最後に唐突に登場する「沙流川の人たち」が、いつごろどのような理由で結びついたのかはわからないが、このようなウバックマ的な要素は、物語中のタブーを自らの地域社会における現実的なタブーとして人々に認識させることを、促進させることにつながったのではないだろうか。

萱野茂は、b)に関する解説のなかでこう語っている。

「こんな恐ろしい話を聞かされたら、絶対造らんでしょね、絶対的に、これは教えが強いですね」。

西島テル（平取町荷負本村）も、民族誌調査における舟造りに関する情報提供の際に、この散文説話のあらすじを語り、「アユシニ ayusni（センノキ）はケットゥムウエン kewtumuwen『根性悪い』といわれる」「大きなとげのあるアユシニなんかチツにするものではないという話を聞いた」⁽³⁴⁾と述べている。

また、筆者は昨年、平取町二風谷アイヌ語教室成人の部において、受講生の方々に丸木舟の材料について尋ねてみた。その日の受講生の半数以上は平取町在住の60～70代の方々だった。その方々の多くが、舟材に適する樹木として「カツラ」「バッコヤナギ」の名前を挙げられた。次に舟材には適さない樹種を尋ねたところ、たちどころに「センノキ」という答えが返ってきた。さらに旭川在住の人までが同じ名前を挙げた。それゆえ筆者がその理由を尋ねたところ、その答えを口にした受講生全員が、アイヌ語教室で「桂の木の舟と栓の木の舟の喧嘩」を学習したからだと答えた。旭

(33) 中川裕『アイヌの物語世界』、平凡社、1997年、P. 87。

(34) 北海道教育委員会『アイヌ民俗文化財調査報告書』Ⅶ、1988年、P48。

川の人も同じく二風谷のアイヌ語教室での学習を理由にあげていた。

このように、口承文芸のなかで生成されたタブーは、伝承と変容の過程で現実のアイヌの生活文化に影響を与えるようになり、やがては逆に、確立された状況の証拠として挙げられるようになった。そしてさらには今日の情報の流れのなかで、新たなタブーの芽となり、かつてそのようなタブーが存在しなかった地方へと伝播し始めている。

おわりに

昨年、口承文芸に登場する植物についてのデータ作成作業を行う過程で、その出現のしかたには、緩やかではあるが一定の傾向があるということに漠然と感じるようになった。それと同時に、以前から親しんでいたハリギリの舟の散文説話に対してなんとなく腑に落ちない点を感じ始めた。そしてそれは、厚岸町でハリギリの丸木舟が6艘も出土したという事実を知った時に決定的な疑問となった。

今回、口承文芸資料の検討だけでなく、民族誌および考古学の側面からも考察するなかでいくつかの点を確認することができた。

- ①ハリギリの丸木舟は、北海道内においてはかなり広範囲にわたって一般的に使用されていたことが民族誌研究のデータから確認された。また、丸木舟の材料には、筆者が考えていた以上に多くの樹種が用いられていたことがわかった。
- ②考古学のデータにおいて、ハリギリは舟部材のなかではむしろ主要な位置を占めており、その使用の歴史もかなり古い時代まで遡ることがわかった。
- ③沙流川流域に伝わるハリギリの丸木舟に関する散文説話は、かつては、現在のような強いタブーをもつ物語ではなかった。それが時間の経過とともに、ハリギリの舟そのものに対するタブーへと変容していった。
- ④さらにこの散文説話をもつウバクマ的な要素から、より強く日常生活にかかわるタブーとして認識されるようになり、沙流川流域においてハリギリの丸木舟は製作されなくなった。

もちろん、③と④は仮説にすぎないが、他地方に伝わる類話からもある程度は裏付けられるように思う。

最後に若干の私見を付け加えたい。

近年アイヌ文化復興運動の高まりのなかで、各地で丸木舟の製作が行われるようになってきている。その際、カツラやバッコヤナギのみが舟材として想定され、そのための原木の入手困難さが訴えられている⁽³⁵⁾。しかし、繰り返しになるが、本稿のデータを見る限り、かつてはかなり多様な種類の樹木が舟材として用いられていたことがわかる。おそらく用途や使用する河川の様相にもとづいて

(35) たとえば、大塚和義『アイヌ 海浜と水辺の民』、新宿書房、1995年、P.124~134。

舟の大きさや重さが決定され、それに見合った樹種が選択されていたのだろう。近年は、特定の樹種のタブー化に反比例して、ある特定の樹種の神聖視が進んでいるとはいえないだろうか。

口頭伝承は常に、語り手の個人的な体験や外部からの情報によって変容してゆく。その点をふまえ、民族誌や考古学の研究成果も広く摂取しながらアイヌ文化研究を進めていく必要性を感じる。

本稿をまとめるにあたり、財団法人アイヌ民族博物館、北海道立衛生研究所、北海道立林業試験場、北海道立林産試験場、北海道埋蔵文化財センターから多くの資料提供ならびにご助言をいただいた。心からお礼申し上げます。

<追記>

本稿の執筆終了後、沙流川流域でカツラとともに代表的な舟材として利用されている「バッコヤナギ」は、実は他の種類のヤナギではないかという疑問が生じてきた。この点に関しては、北海道立林業試験場から、北海道に自生しているバッコヤナギおよびエゾノバッコヤナギは、共に直径60cm程度にしか生育しないため、大型の丸木舟を造ることは不可能ではないかという指摘をいただいて以来、なんとか同定できないかと努力してみた。しかし、二風谷近隣では丸木舟の材料となるほどに成育した「バッコヤナギ」の自生地が確認できていないこと、現在は積雪のため自生が確認できている山中に入れないことなどから、同定に必要な枝葉を採取することができなかった。その他、写真や映像資料の入手についても追求したが、適当な資料は存在しなかった。

現時点では、幹の直径が120cmにも及ぶという点からオオバヤナギではないかと推定されるが、解決すべき課題として追記するとともに、できるだけ早い時期に同定作業を行ない、報告の機会を持ちたいと考えている。

<参考・引用文献>

- アイヌ民族博物館『上田トシのウエベケレ』、1997年。
- 石井謙治『日本の船』、東京創元社、1957年。
- 犬飼哲夫「アイヌの木皮舟」『北方文化研究報告 第1輯』、北海道大学、1936年。
- 犬飼哲夫・武笠耕三「アイヌの丸木舟の作製」『北方文化研究報告 第8輯』、北海道大学、1953年。
- 大塚和義『アイヌ 海浜と水辺の民』、新宿書房、1995年。
- 萱野茂『ウエベケレ集大成』、アルドオ、1974年。
- 同 『キツネのチャランケ』、小峰書店、1974年。
- 川崎晃総『日本丸木船の研究』、法政大学出版局、1991年。
- 久保寺逸彦『アイヌの昔話』、三弥井書店、1971年。
- 熊崎農夫博・三野紀雄「厚岸町における丸木舟について」『北海道開拓記念館研究紀要第25号』、北海道開拓記念館、1997年。
- 佐藤一夫「アイヌの丸木舟」『郷土の研究2』、苫小牧郷土文化研究会、1967年。
- 佐藤直太郎「釧路アイヌの舟」『佐藤直太郎郷土研究論文集 釧路叢書第三巻』、1961年。
- 更科源蔵『アイヌ民話集』、みやま書房、1981年。
- 島地謙・伊藤隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』、雄山閣出版、1988年。
- 世界の有用木材300種編集委員会『世界の有用木材300種一性質とその用途』、日本木材加工技術協会、1975年。
- 知里真志保『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』、日本常民文化研究所、1953年。
- 知里幸恵『アイヌ神謡集』、郷土研究社、1923年。
- 出口晶子『日本と周辺アジアの伝統的船舶—その文化地理学的研究—』、文献出版、1995年。
- 中川裕『アイヌの物語世界』、平凡社、1997年。
- 難波琢雄「アイヌ丸木舟の地方型」『アイヌ文化 第16号』、アイヌ無形文化伝承保存会、1991年。
- 北海道『北海道の自然と暮らし』北の生活文庫第2巻、1997年。
- 北海道教育委員会『アイヌ民俗文化財調査報告書』I～XVI、1982年～1997年。
- 同 『北海道文化財 第六集アイヌ文化篇』、1964年。
- 北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群XVIII』、1996年。
- 同 『美沢川流域の遺跡群XX』、1997年。
- 本田優子「アイヌ口承文芸にあらわれる植物および植物神について」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要第3号』、北海道立アイヌ民族文化研究センター、1997年。
- 堀江敏夫『アイヌ丸木舟の研究』、苫小牧地方史研究会、1967年。
- 堀江敏夫「アイヌの板綴舟について」『郷土の研究3』、苫小牧市郷土文化研究会、1971年。
- 松本信広「上代独木舟の考察」『日本民族の起源2』、講談社、1978年。
- 山内文「発掘丸木舟及び櫂の用材について」『人類学雑誌 第61巻2号』、1950年。
- 山本祐弘『樺太アイヌ住居と民具』、1970年。
- 由良勇『北海道の丸木舟』、マルヨン印刷株式会社、1995年。

Harigiri Dugouts: An Examination from Ainu Ethnological/Archaeological/oral literature material

HONDA Yuko

With one exception, there is, so far as the author knows, no mention in Ainu oral literature of taboos about using specific plants as materials for implements. The sole exception, related in prose tales, is the strong taboo found in the Saru River region which prohibits the use of the Harigiri tree (*Kalopanax pictus* Nakai) for making dugouts. To determine the reason for this taboo, the author has in this paper reviewed all the available documentation about harigiri dugouts as well as examined what materials were generally used to make dugouts.

The results are as follows.

1. From an ethnological perspective: Harigiri dugouts were in general use throughout Hokkaido. Moreover, an even wider variety of trees than the author had realized were used as material for making dugouts.

2. From an archaeological perspective: Among the dugouts which have been excavated, harigiri is the predominate material, which indicates that its use goes back to antiquity.

3. From an oral literature perspective: A comparison of prose tales featuring harigiri dugouts in the Saru River region, as recorded in the three different Ainu texts, yielded the following hypotheses. First, the main theme of prose tales about harigiri dugouts was, early on, about putting things to the practical use for which they were made; there were no tales about the strong taboo which now exists. As the tales were handed down, however, the emphasis on practical use was transformed into a taboo about making harigiri dugouts themselves. Second, because of the historical elements contained in the prose tales, the taboo became even more ingrained in everyday life, and as a result harigiri were no longer made in the Saru River region.

Key words

: Ainu dugouts, material for making dugouts, Ainu ethnological studies, Ainu archaeological studies, Ainu oral literature